

渡部分水家文書

今年度の所蔵資料展では、南檜岡地域で代々肝煎や村長をつとめていた渡部分水家から寄贈された資料群を紹介します。中世から檜岡城の城下として発展した檜岡郷を基盤とする南檜岡村は、江戸時代には北檜岡村を親郷とする秋田藩の支配下に置かれていました。渡部分水家はその中で、近世から近代にかけて村の中心的役割を担い、村の経営や近代文化のさきがけとなる新時代の活動に関わった記録を多く残しています。

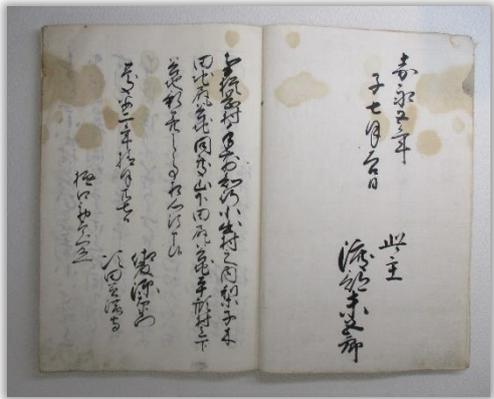
南檜岡地域が置かれた地理的特徴や、近代以降に花開いた新たな時代の息吹を感じる資料から、身近な地域の魅力発見のきっかけになれば幸いです。



渡部分水家

展示資料の紹介

1. 近世の南檜岡



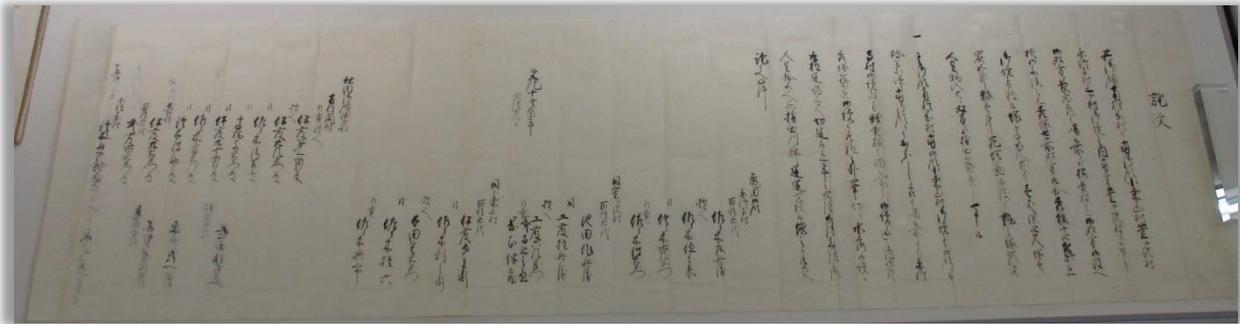
御地開方御指紙写 嘉永5年7月吉日

渡部末五郎が嘉永5年に支郷である小出村と平形村の指紙開の指紙を写したものの。新田開発の許可を得たのは、当地給人の樋口勘右衛門で、発給者は秋田藩家老の佐藤源右衛門と須田美濃守。写した指紙の年代は元和から貞享の長期間にわたったもの。

さしがみひらき
新田開発と指紙開

佐竹氏が秋田に入部すると財政基盤確保のため新田開発が推進されていった。新田開発には指紙開と注進開があり、このうち秋田藩で積極的に行われたのが指紙開による新田開発である。

指紙とは新田開発の許可状のことで、本田に支障がない限り自由に開墾することができ、開墾された土地は家老の連署により家臣に与えられた。そのため、佐竹氏の家臣たちは積極的に開墾に取組み、耕地権を与えられる農民たちもそれに協力した。



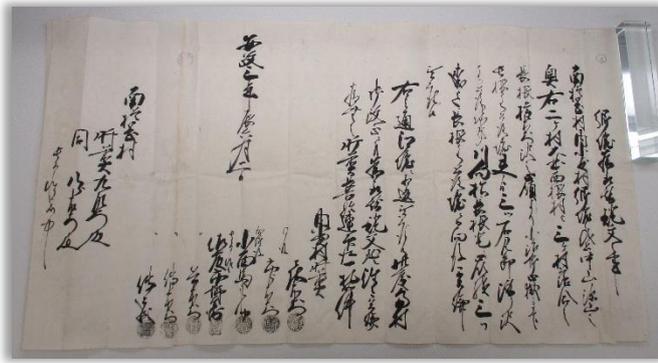
証文 文化10年10月22日

亀田領の小栗山村、萱ヶ沢村、円行寺村の肝煎・扱人・百姓代が連名で南檜岡村肝煎・扱人等と親郷肝煎である北檜岡村鈴木多郎兵衛に宛てた、国境の森塚の位置・大きさ及び道幅などを取り決めた証文の写。江原田村に残る証文と同年月で塚の大きさも同じである。

裏書には秋田藩・亀田藩の境目役人の名前が見える。

南外地域の国境(安政4年頃)

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①		
仏堂台より松葉長根まで御縁り通り六里余りの在所。	仏堂台より境川まで二丁程。南御立林。川上は田畑野山。小道あり。	領小戸川村。小屋あり。	南平田林。奥は草飼山。外は矢鳥坊田石沢口御境水上まで半里程。	田・矢鳥・亀田領三ヶ関の御境目。小道あり。	赤平沢沢より水上蟻長根まで半里程。南平は御札山。奥は草飼山。南は亀田領。外は矢鳥領。ここは秋田・矢鳥・亀田領三ヶ関の御境目。	寺沢沢口より水上志ふう蒲長根まで一里程。南平は田林。北は草飼山。外は亀田領、矢鳥領戸川村。この沢に小道あり。	龜田領立倉村。	平沢沢口より水上高津森まで一里程御運上山。南平は御札山。外は門ヶ沢沢口よりえぼし峠まで一里程御運上山。外は龜田領。	当村西ノ又沢口より御境水上松葉長根まで二里程御運上山。外は龜田領。



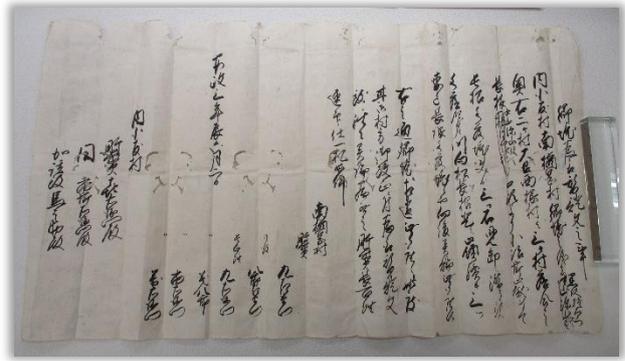
郷境為取替證文之事 安政3年6月2日

同じ秋田藩である南檜岡村と内小友村の郷境の取り決め証文。村同士の取り決めのため、押印された正本が南檜岡村に残されている。

ならおかごう
檜岡郷

成立年は不明だが、中世はじめ頃には村落として広がりを見せていたものと思われる。檜岡の名は、菅江真澄の「月の出羽路」によると、神宮寺嶽=檜岡山のふもとに広がる檜岡ノ荘が元であると考えられる古い地名である。

三浦氏、小笠原氏(のちの檜岡氏)が領主として納めた「檜岡城」が古館山に位置し、両氏の支配地として発展し、江戸時代に神宮寺の西に北檜岡村が成立すると、南檜岡村として存続した。



郷境為取替證文之事 安政3年6月2日

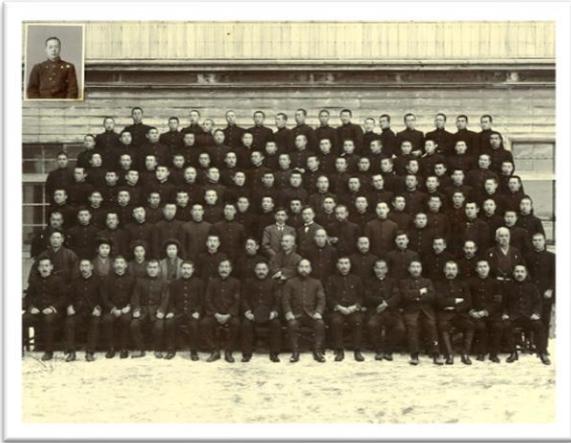
内小友村作成の証文と同文で、南檜岡村肝煎・長百姓連印で作成した証文の写し。下書きなのか、地名の修正が行われている。

南檜岡村年表		南檜岡村年表	
年代	内 容	年代	内 容
中世初期	この頃に檜岡郷が成立か	明治31 (1898) 年	南檜岡倶楽部(野球チーム)を結成する、また南檜岡小学校補習科生徒が秋田市内学生と野球の試合をする
長禄2 (1458) 年	小笠原氏が檜岡城を築いて檜岡氏を名乗り、そこに城下町が形成される	明治32 (1899) 年	半田忠蔵、40歳の若さで死去
慶長7 (1602) 年	佐竹氏が秋田に国替え、檜岡郷を含む山本郡(のちの仙北郡)も支配地となる	明治36 (1903) 年	渡部良助が郡会議員に当選
寛永7 (1630) 年頃	北檜岡村に対して、檜岡郷を南檜岡村と称するようになる	明治37 (1904) 年	日露戦争開通(～明治38年)、奥羽本線秋田-大曲間開通
延宝 (1673～) 年間頃	親郷奇郷が組織され、南檜岡村は北檜岡村を親郷とする奇郷村となった	大正2 (1913) 年	落合酒造株式会社(現出羽鶴酒造株式会社)設立
文化10 (1813) 年	仙北郡各地で秋田領・亀田領・生駒領の国境の証文が交わされ、境界が築かれた	大正3 (1914) 年	3月15日に秋田仙北地震発生、南檜岡村は負傷3名・全壊39戸・半壊20戸・破損367戸、第一次世界大戦勃発(～大正8年)
文政9 (1826) 年	菅江真澄が南檜岡村を訪れる	大正10 (1921) 年	半田忠蔵の顕徳碑を大正天皇即位記念高野運動場に建設する(現在の南外中学校敷地内)
慶応4 (1868) 年	戊辰戦争において奥羽越前藩同盟軍の陣となり、南檜岡村でも戦闘が行われる	大正12 (1923) 年	郡制を廃止
明治4 (1871) 年	廃藩置県により南檜岡村は秋田県管下となる	昭和6 (1931) 年	満州事変勃発
明治5 (1872) 年	大区小区制の実施により南檜岡村は第十一大区小三区となる	昭和8 (1933) 年	南檜岡郵便局開設
明治6 (1873) 年	大区小区の改編により第五大区小五区となる	昭和12 (1937) 年	日中戦争開戦
明治11 (1878) 年	郡区町村編成法の施行により、仙北郡役所が新設され、翌年さらに神宮寺に首部役場が置かれた	昭和16 (1941) 年	国民学校令により南檜岡国民学校・及位国民学校となる、太平洋戦争に突入
明治12 (1879) 年	坊田小学校創立	昭和20 (1945) 年	8月15日に終戦
明治14 (1881) 年	半田忠蔵が坊田小学校訓導となる	昭和21 (1946) 年	公職追放令により村長・助役が退任
明治17 (1884) 年	町村戸長役場区域が定められ、南檜岡村に戸長役場が置かれる	昭和22 (1947) 年	教育基本法・学校教育法により南檜岡中学校が南檜岡小学校に併置される
明治18 (1885) 年	半田忠蔵と八嶋竹治が南外青年会を創設する	昭和23 (1948) 年	南檜岡農業協同組合が設立、南檜岡中学校が独立した新校舎を設置
明治22 (1889) 年	市制町村制の施行により、近代的な行政組織としての南檜岡村が誕生した(初代村長：伊藤庫之助)	昭和26 (1951) 年	南檜岡公民館設置
明治25 (1892) 年	及位小学校創立	昭和27 (1952) 年	南檜岡村教育委員会が発足
明治27 (1894) 年	日清戦争開戦(～明治28年)	昭和30 (1955) 年	南檜岡村と外小友村を廃して南外村を設置する(初代村長：伊藤志右衛門)
明治29 (1896) 年	櫻田鑑之助、南檜岡小学校訓導として赴任	昭和31 (1956) 年	南外村第一回議会議員選挙により新議員22名が選出される
明治30 (1897) 年	半田忠蔵、櫻田鑑之助、仙波廣治、八嶋竹治が発起人となり、済々義会が発足		

2. 渡部分水家の人々

渡部郁太郎

渡部郁太郎は大正3(1914)年3月に秋田中学校を卒業し、秋田師範学校第二部に進学、翌年2月に卒業している。卒業後は、南檜岡小学校教員になり、同年8月には六週間現役兵として第17連隊に入隊した。その後も教員を続けたが、大正8年に父・良助が亡くなると、大正11(1922)年3月に教員を退職して家業を継いだ。

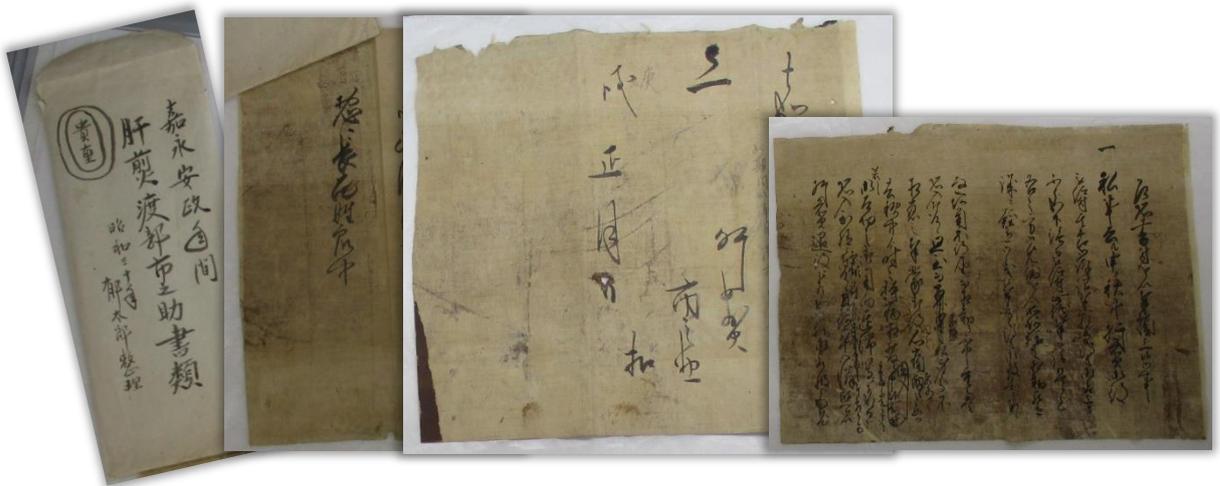


秋田師範学校本科第一部・第二部 卒業記念写真
(大正4年2月撮影)

渡部郁太郎、古文書を発見す

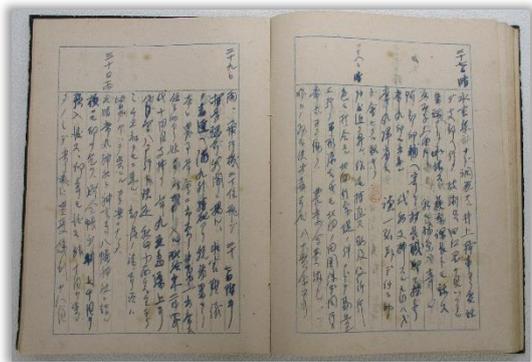
郁太郎は村長を辞職したあと、昭和23~24年頃に、五尺1双の古屏風の破損を直そうと裏張りを剥がしてみた。すると、中張りから何やら古い書付らしきものが出てきた。これらの古文書の多くは、田屋村武藤市右衛門に関係するものが多く、武藤家から貰って屏風の中張りに使用したものと思われた。南檜岡の肝煎時代が偲ばれる古文書が見え、寺院のことなど非常に価値のあるものだと感じた。一番古い年号は、宝暦・寛政頃であった。これはきちんと保存しなくてはならない、と思った郁太郎は昭和31年頃にかけて古文書を整理し、発見の詳細のメモを残したのである。

展示している古文書にも鉛筆で解読等が書かれており、また番号が付されていたり、付箋に筆書きでメモが貼られていたりする。こうした形跡から、郁太郎が中張り文書以外にも家の古文書を整理した様子がうかがえ、現在まで南檜岡に関する古文書が渡部分水家に伝わったのも、郁太郎による古文書の発見が大きく影響しているかもしれない。



肝煎市之助 控 嘉永3年正月

肝煎市之助が惣長百姓に宛てた肝煎退役願の写し。嘉永元年から肝煎をつとめていたが、病気などにより肝煎をつとめられないという趣旨が書かれている。市之助はその後も肝煎をつとめ、現役のまま病死した。



渡部郁太郎日記 昭和19年

昭和19年7月はじめに村長への推薦が決まり、7月27日に村長に認可されている。新聞掲載は29日だが、27日には村長職印を作っていることがわかる。南外村史では、『秋田県町村合併誌』に拠って就任日を11月28日としている。

南檜岡及び南外村長として

近代以降も、渡部分水家は南外地域において村の中心的役割を担っている。3代にわたり村長となり、そのほか村会議員や郡会議員なども歴任している。特に渡部郁太郎は、戦中の難しい時代に村長をつとめ、戦後に公職追放を受けて辞職している。

渡部良助 第7代南檜岡村長
渡部郁太郎 第17代南檜岡村長
渡部任之助 第19代南檜岡村長、第5～6代南外村長

※公職追放：戦時中に国策に協力した人たちが公職から追放されたが、村長は大政翼賛会支部長を兼ねたため対象となった。

渡部郁太郎は教員を退職した大正11年3月～4月にかけて、東京～高野山～大阪へ旅行している。

長男の任之助が入院したため、旅行を中断して関西旅行の途中で帰宅している。

明治30年代に奥羽本線が開通して、「道中名鑑」刊行時よりも旅行しやすくなったが、当時の旅行は1ヶ月以上の長旅だった。



道中名鑑 明治20年10月21日

明治時代の旅行ガイドブック。秋田は若松～秋田～弘前の旅行経路の中で紹介されている。南檜岡の最寄りでは、神宮寺と北檜岡が掲載されており、お休み処として神宮寺「細谷五郎作」の名前が見える。

3.近代の南檜岡と済々義会

村づくりの先駆 済々義会と半田忠蔵

済々義会は、南檜岡の青年有志により、明治30(1897)年に結成され、学生や青年達の教育の普及発達を目的として、現在の生涯学習や青年会活動に通じる活動を行った。

発起人は、半田忠蔵・桜田鐵之助・仙波廣治・八嶋竹治の4名。南檜岡小学校で行われた発会式は、30名あまりの会員と数十名に及ぶ聴衆が詰めかけた熱意あふれるものであったと、会誌『済々義会々誌』が伝えている。

～初代会長 半田忠蔵～

この済々義会の発足に中心的な役割を果たしたのが、初代会長に選任された半田忠蔵であった。

半田忠蔵は、万延元(1860)年、秋田藩士・半田茂助の長男として、久保田城下檜山(現在の秋田市)に生まれた。明治維新後、半田家は家禄を奉還したこともあり、明治7(1874)年にかつての知行地であった南檜岡に父と共に移住した。

秋田師範学校を卒業し、明治14(1881)年、教員として、坊田小学校(後の南檜岡小学校)に赴任しました。

～夜学を開き、学問の道を拓く～

『南外村史』によると、明治29(1896)年の南檜岡村の就学率は、わずか36.3%(男60.5%、女6.4%)であった。貧窮や病気により学校に通えない人も多く、女子に至っては就学の必要性がほとんど認識されていない時代だった。

真に学びたいと思う人に学問の道を閉ざさせないために、人々の意識を変え、教育水準を向上させることが半田忠蔵の悲願だったはずだ。半田忠蔵は、村の有力者を訪ねて青年教育の重要性を説き、同志を集めて語り合い、自宅では、昼間学校に通えない青年のために夜学会を開いた。

こうした活動が下地となり半田忠蔵と夜学会の門下生が中心となって、済々義会が発足し運営された。

～多くの人材を世に送る～

残念ながら、済々義会の発足から2年後の明治32(1899)年8月、半田忠蔵は40歳の若さで病に倒れる。志半ばであったに違いない。

「済々」は「多くて盛んなさま」という意味を持つ。政治家として活躍した伊藤恭之介、仙北医院を開設した八嶋竹治、村の産業教育を起こした相馬市蔵、渡米し柔道を広めた伊藤徳五郎は、いずれも済々義会あるいは半田忠蔵の門下生であった。

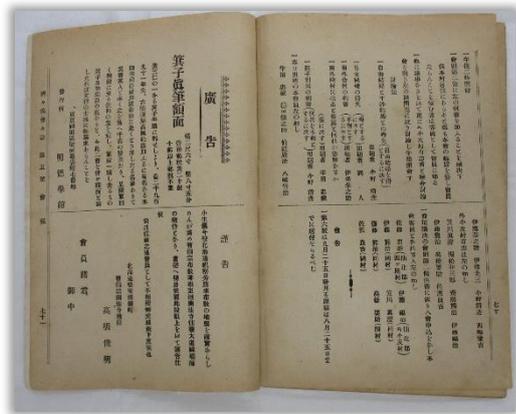
半田忠蔵の精神は、門下生や済々義会に引き継がれ、多くの有能な人材を輩出し地域づくりの原動力となった。



濟々義会々誌

会誌『濟々義会々誌』を通じて、会員達はお互いの意見を発表しあった。その内容は、村の現状分析や、産業・村政に関する具体的な提言、教育論など多岐に及ぶ。

文芸欄もあり、漢文や詩歌などを発表する場でもあった。



半田忠蔵の教育理念

濟々義会々誌で発表された半田忠蔵の論説や随想から、その教育理念の一端を伺うことができる。意識して紹介する。

「青年の覚悟」(濟々義会々誌第1号)

・欧米諸国に肩を並べるためには、政治家であっても、労働者であっても、一人ひとりが自分の考えをしっかりと持ち、学力と品性を備えていなければならない。

「随感随想」(濟々義会々誌第1号)

・贅沢な酒や料理を並べ、美しい服装や立派な住居で、相手に対する信義を表しても、それは本当の交際ではない。信義と礼讓(礼儀をつくして謙虚な態度を示すこと)が大切である。

・自ら知りたいと思っていない者は、学校に入っても学問を進めることはできない。学問の喜びは、自分から求めて努力してこそ体験できる。

・お金があるからといって無理な遊学はしないほうが良い。都会の汚風に染まって、以前の素朴な気質を失い、講義を聞き流し、遊びに使った借金を仕送りで返済する。このような者は、分をわきまえて家業を助けるべきだ。

濟々義会々誌 第5号 明治31年7月31日

明治31年の夏季集会には、南檜岡村と外小友村の有志15名が集まり次のテーマを討議している。

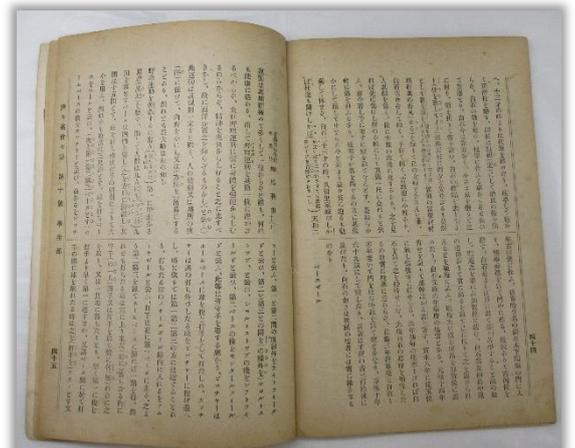
- 自由結婚と干渉結婚の得失
(自由結婚を得と決す)
- 男女同権の得失
(得と決す)
- 南外合併の利害
(不利と決す)
- 南外両村に牧畜と養蚕の何れかが急務か
(養蚕と決す)
- 親子別居の利害
(別居を不利と決す)

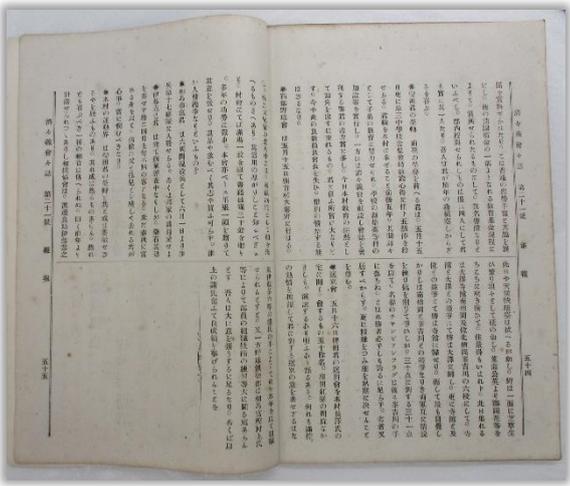


濟々義会々誌 第10号

明治32年5月31日

第10号には、当時16歳であった相馬利一が「ベースボール」を投稿し、野球の用語やルールを解説している。





済々義会々誌 第21号 明治34年8月18日

5月15日に西部野球会が強首の大巻野で開催され、大澤・寺館・南檜岡・及位・北檜岡・峯吉川の6校が参加。「名誉のチャンピオンフラグは複も峯吉川の手落ちぬ」とある。

また、済々義会や南檜岡倶楽部の第一人者であった桜田鐵之助が第三中学(横手中)に異動となり、送別会が催された記事も見える。



会誌『済々義会々誌』

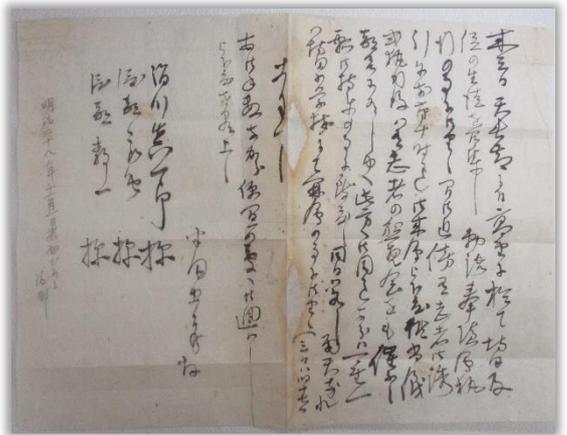
当時の地域課題や若者達の考えを伝える貴重な資料である。

明治30年11月30日発行の第1号から大正3年1月7日発行の第52号まで確認されているが、途中8冊(20号・24号・33号・41号・45号・46号・47号・51号)は現在のところ確認されていない。

半田家と南檜岡

江戸時代、佐竹家臣のうち56名もの藩士が南檜岡村の地頭給人となっている。そのうちの一人が半田佐左衛門である。地頭給人たちは、指紙開により新田の知行権を得ていたが、常に知行地にいたわけではない。半田家の場合、南檜岡に限らず仙北郡、雄勝郡、平鹿郡、河辺郡、秋田郡、山本郡に本田と新田を合わせて262石500合の知行高を持ち、南檜岡の新田はわずか20石である。しかし、その縁がのちに半田忠蔵と南檜岡を強く結び付けることとなった。

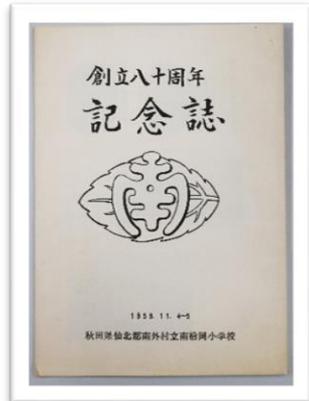
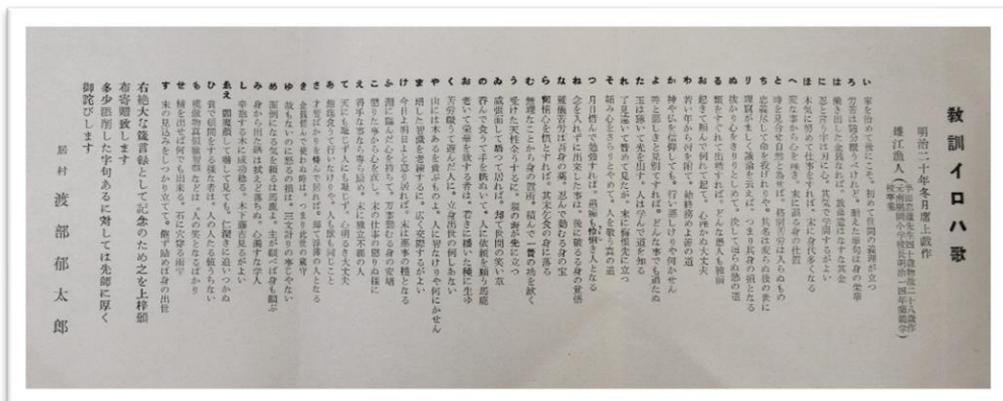
半田家は、秋田藩士として久保田城下に居住していたと考えられる。実際に忠蔵は、万延元(1860)年に秋田城下で柔術師範の家に生まれている。明治維新により秋田藩士としての特権が失われると、明治7(1874)年にかつての知行地を頼り、南檜岡村大杉に移り住んだ。明治14(1881)年に秋田師範学校を卒業、南檜岡に戻り教員として奉職、その生涯をおして南檜岡の近教育の発展に尽力した。



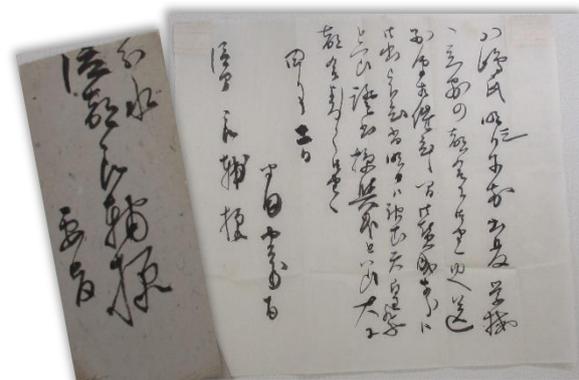
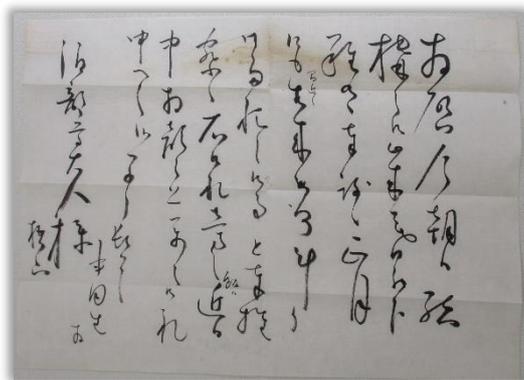
渡部良助ほか2名宛半田忠蔵書簡 明治28年11月1日

天長節に坊田小学校と及位小学校の生徒を集めて、教育勅語の奉読会を執行することについて、参会を呼びかける内容。儀式執行後には、有志による懇親会も計画されている。

教訓イロハ歌(南檜岡小学校創立八十周年記念誌)



半田忠蔵が明治20年に詠んだ「教訓イロハ歌」が、約70年後の昭和34年に発行された南檜岡小学校八十周年記念誌に載せられている。半田忠蔵は「雄江漁人」と号した。

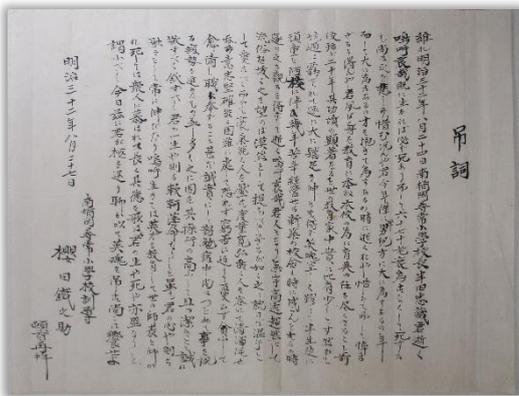


渡部 尊大人宛半田生書簡 (明治)

お歳暮のお礼を兼ねて、近々拝顔に伺いたい旨をしたためたもの。半田忠蔵が渡部良助に宛ててかいたものカ。

渡部 良輔宛半田忠蔵書簡 (年不明) 4月2日

八嶋(竹治)氏が明日3日上京のため、開催する送別会への出席について渡部良輔(助)に宛てた書簡。

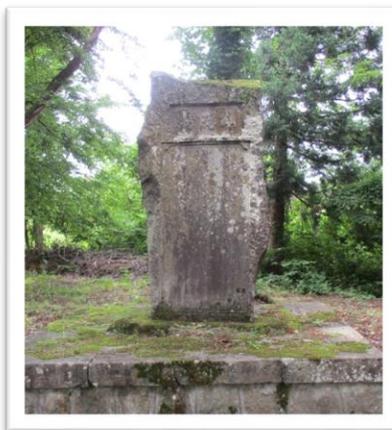


吊辞 明治32年8月27日

40歳の若さで病に倒れた半田忠蔵の葬儀には数百人の会葬者があった。

吊辞を詠んだ桜田鐵之助は、済々義会の発起人のひとり。この時、半田忠蔵と共に南檜岡小の教員を務めていた。半田忠蔵の跡を継ぎ、済々義会2代目会長となった。

半田忠蔵の頌徳碑



大正10年、忠蔵の遺徳を顕彰するため、済々義会の手で頌徳碑が高野記念運動場に建てられた。現在は、大仙市立南外中学校敷地となっている。

4.南檜岡と少年野球

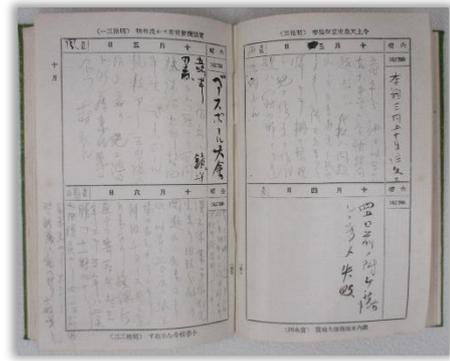
桜田鐵之助と南檜岡倶楽部



済々義会は「南檜岡倶楽部」を結成し、野球にも熱心に取り組んでいる。その中心が桜田鐵之助（明治4年～昭和15年）であった。

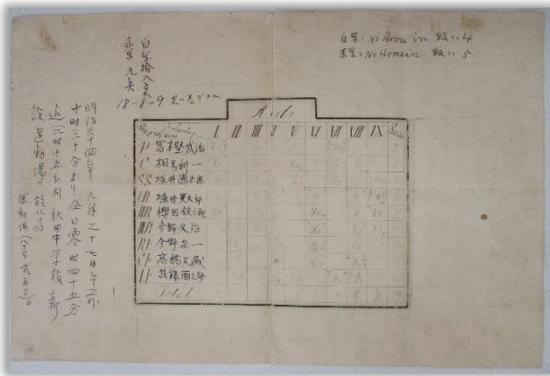
教員であった鐵之助は、教育に野球を取り入れた秋田県における第一人者でもある。

明治29年から明治39年まで南檜岡小学校に勤務し、野球を研究し指導した。



渡部郁太郎日記（明治44年）

秋田中学時代の渡部郁太郎の日記。10月5日の予定欄にベースボール大会と書かれており、日記本文には「放课后五年対四年生ノベースボール競技アリ」の文字が見える。郁太郎の後輩たちは大正4年に第1回全国中等学校野球大会（現在の甲子園大会）で準優勝している。



野球スコア 明治34年9月27日

明治34年9月27日に行われた秋田挑戦杯の第3回大会のもの。南檜岡倶楽部と秋田中学が対戦し、9対18で秋田中学が勝利している。のちに神宮寺に少年野球を広めた富樫武治や桜田鐵之助の名が見える。



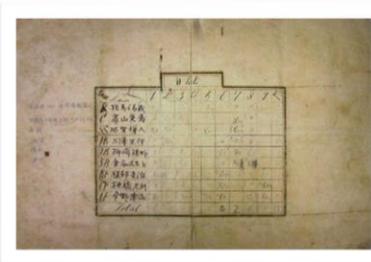
バット（大正）

渡部郁太郎が秋田中学時代に使用していたバット。

大正元(1912)年10月に行われた野球の試合の写真。秋田中学校対横手中学校の試合。バッターは渡部郁太郎。南檜岡小学校の生徒時代から野球に親しみ、秋田中学時代に保守として野球に打ち込んだ姿が見て取れる。南檜岡小学校教員になってからも野球を続けている。



秋田中学対大館中学 野球試合記念写真（大正元年10月撮影）



野球スコア裏面

5. 渡部分水家と南檜岡の神社



南檜岡の神社と渡部家

南檜岡をはじめ、南外地域では集落の大小にかかわらずそれぞれ産土神を祀っている。また、この地域の神社は地域のコミュニティの場になることも多く、集会場などが併設された神社が数多く存在するという特徴がある。

渡部分水家は地元の神社の運営や祭典に積極的に関わっていた。総代を務めていた伊豆神社をはじめ、ほかの地元神社の社殿移転や、境内の見分を行っていたことが日記から分かる。そのため宗教、特に神道に関心があったのか、寄贈いただいた資料の中にも関するものがいくつか見受けられる。今回はそうした資料をいくつか展示している。

渡部郁太郎日記 昭和23年1月1日

午前10時から伊豆神社で部落寄合会が開かれている様子が見える。奉仕会や新しく部落会に加入した人のこと、宴会を行ったことなどが書かれている。

神社総代

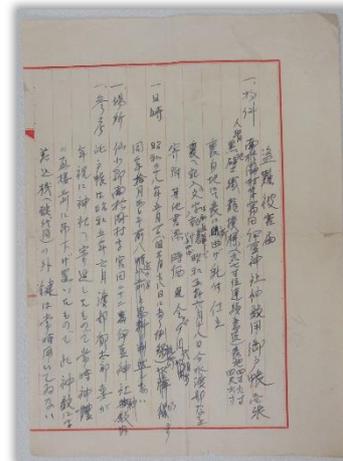
「総代」とは神社の行事や運営に参加する氏子集団の代表者のこと。多くの場合は「氏子総代」と呼んでいるが、日記では「神社総代」となっている。「総代」は宮司が氏子の中から最も信仰心の篤い人を選んだり、役員によって選出される。

渡部分水家は、代々伊豆神社の総代を務めてきた。日記からも昭和23年に伊豆神社の木の伐採について神社総代として進めていたことが分かる。また、祭礼の際には寄付をしていたこともうかがえる。

盗難被害届

昭和28年5月1日

昭和28年5月1日に、伊豆神社から神仏の前にかけるとばりが盗まれた際の被害届。とばりは昭和5年に渡部郁太郎の妻が寄進したものだと言われている。



伊豆神社

通称「ねじれごんげん」と呼ばれている南外田屋村字宮田にある神社。主神は事代(ことしろ)主(ぬしの)神(かみ)と天照大神。旧暦3月18日に例祭を行っている。

現在は拝殿、神殿のほか集会場があるが、明治3年の「神社書上帳控」(和合高橋社家文書)によると、かつては大きな舞殿があった。集会場は部落寄合会の会場として使用されることもあり、そこでは奉仕会の決算報告をはじめ、神明社の移転についても話し合いが行われていた。日記によると昭和16年に部落常会の会長になった渡部郁太郎が、これらの話し合いを進行していたことが分かる。



八幡神社



下湯ノ又にある八幡神社。主神は誉田別命と少彦名命。由緒については観応3年に伊藤万右衛門家の氏神として神事を行うために作られたとされる。次第に湯ノ又地区の鎮守として崇敬されるようになり、明治5年、社格が村社に列せられることになった。

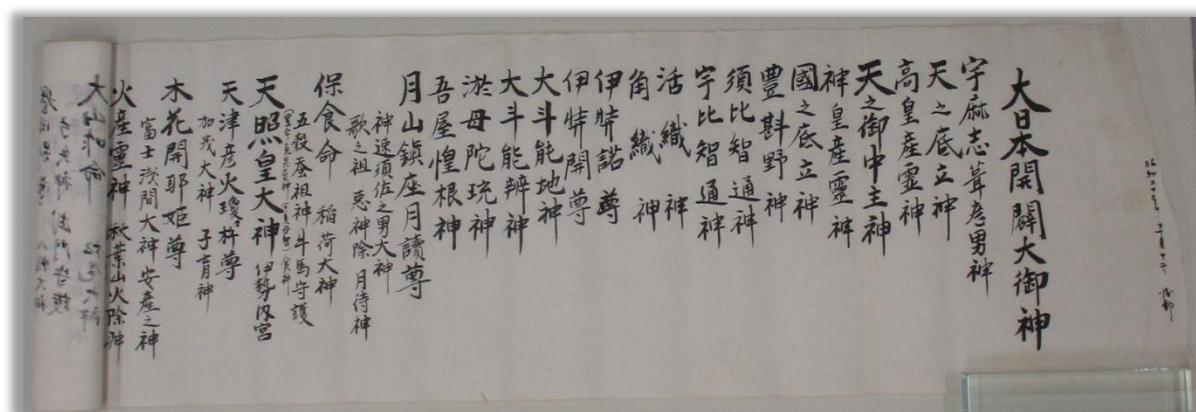
大正13年5月、八幡神社前に忠魂碑が建立され除幕式が執り行われている。除幕式には郁太郎も参加している。忠魂碑には「元帥陸軍大将子爵川村恵明書」と書かれている。

八幡神社にはこのほか大平山碑、出羽三山碑など様々な碑石が建立されている。



道春撰 本朝神社考 卷六

江戸時代の朱子学者、林羅山が神仏習合により神道が廃れていることに憤って書いたもの。神泉苑、安倍晴明など神道に関係する場所や人名に関することが書かれている。



かいびやくおのみかみ

大日本開闢大御神 昭和23年11月12日

このなのさくやひめのみこと やまとたけるのみこと

天照大神や木花開耶姫命、日本武尊など日本神話の神々の名前の一覧。

漢字名のあとに仮名でも書かれている。

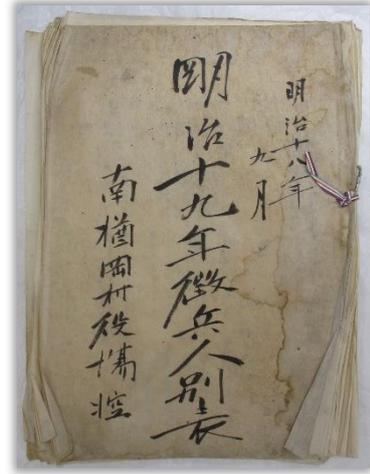
6.南檜岡の戦争

近代の徴兵制と南檜岡の人々

近代日本の軍事制度は、徴兵制の導入により国民皆兵となり、対象者は徴兵検査に合格すると兵役が課せられた。

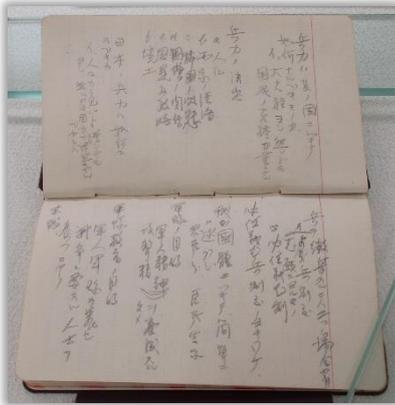
この徴兵制のもとで行われた最初の大規模な戦争は、明治27(1894)年にはじまる日清戦争である。日清戦争に従軍した人の中で南檜岡村の戦死者は明治24年に徴兵され同28年の戦争開始により出征した1名であった。死因は脚気であり、近代戦争における戦地での食糧補給などの課題がうかがえる。

10年後に勃発した日露戦争は、日清戦争の結果を受けて軍事拡張政策のもと実行された。南檜岡村からは45名が出征しており、県公文書館に爆撃による戦死の死亡通牒が残っている等、徴兵制と近代戦争の進化により南檜岡の人々の身近にも悲惨な戦争の現実がせまっていた。その後も、日本は軍事色を強めながら、総力戦体制のもと日中戦争から太平洋戦争へと突入していくことになる。



明治十九年徴兵人別表 南檜岡村役場控
明治18年9月

明治5年の「徴兵告諭」からはじまった近代日本の徴兵制は、翌6年に徴兵令として発せられ、17歳から40歳までが徴兵の対象となった。各戸長役場では、対象者の人別表を作成する必要があり、南檜岡村でも翌年の徴兵対象者の調書を作成している。



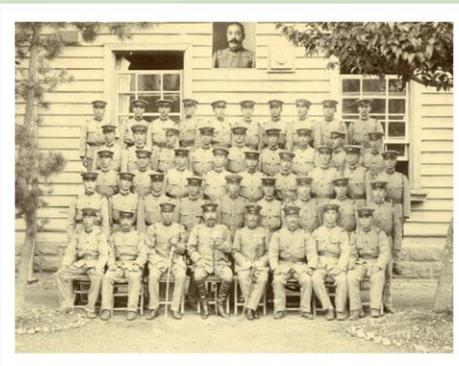
六現雑記 大正4年8月

渡部郁太郎は秋田師範学校を卒業したあと、地元の小学校で教員をしていたが、大正4年に六週間現役兵として、秋田市にある第17連隊において軍隊実習を受けており、その際に書かれた日記が残されている。学科の授業や演習などを受けている様子が見える。

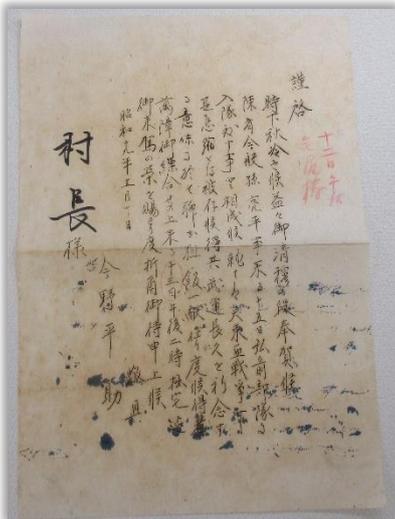
六週間現役兵

明治6年に制定された「徴兵令」は、明治22年に大改正が行われ、近代日本の徴兵制度が確立した。

満17歳から満40歳までの男子すべてに徴兵義務を課したが、師範学校を卒業した満28歳以下の官公立の小学校教員は、六週間現役に服したのちに国民兵役に編入された。これは教員への優遇策であると同時に、軍隊生活を経験させて将来の兵士となる子どもたちの教育に当たらせることも目的だった。



陸軍六週間現役兵 記念写真
(大正4年9月撮影)



村長宛今野平助書簡
昭和19年11月10日

弘前部隊に入隊するため、自宅で武運長久を祈念する会を13日に催すため、関係者に送った案内状。渡部郁太郎日記の昭和19年11月14日の頁に挟まれていた。



渡部郁太郎日記 昭和20年

南檜岡村長として終戦を迎えた郁太郎は、終戦日当日も朝から軍事関係の対応をしている。正午のラジオ放送で、天皇陛下による戦争終結の言葉を聞いた時の感情を「万感胸ニ満ツルモノアリ」と表している。

昭和戦前期の南檜岡の入営・退営兵

年	入 営 兵		退 営 兵	
	陸 軍	海 軍	陸 軍	海 軍
1	3	4	3	2
2	13	0	3	0
3	13	3	5	1
4	13	1	7	3
6	15	1	10	3
7	8	1	2	3
8	9	0	9	1
14	19	3	4	0
17	25	3	2	0

昭和戦前期の南檜岡の徴兵検査結果

年	壮丁人員	甲 種	第一乙	第二乙	丙 種	丁 種
1	33	12	5	10	5	1
2	43	17	5	5	6	3
3	59	24	3	9	13	5
4	52	25	3	5	7	2
6	45	16	1	3	10	7
7	40	12	0	3	14	4
8	37	9	6	6	7	1
14	41	20	8	2	8	2
17	45	20	5	8	12	0